



TITLE:

琉球蔡姑婆傳説考證：媽祖傳説の開展に關聯して

AUTHOR(S):

李, 献璋

CITATION:

李, 献璋. 琉球蔡姑婆傳説考證：媽祖傳説の開展に關聯して. 東洋史研究 1957, 16(2): 154-185

ISSUE DATE:

1957-09-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/148073>

RIGHT:

琉球蔡姑婆傳說考證

——媽祖傳説の開展に關聯して——

清朝最初の冊封使として順治十一年に命を受け、康熙二年に渡琉した張學禮の使琉球錄に、

〔二十日〕再過猴嶼、見梅花所故城……。通官謝必振

云：天妃姓蔡、此地人。爲父投海身亡、後封天妃。

と見えてゐる。その通官が天妃は梅花所の蔡氏の出で、父のために海に身投げし、後に天妃に封せられたものだと言つたといふのである。天妃すなはち媽祖が元神を現はして、海に溺れた父親を助けたといふ話は、すでに使錄より三十年も前の閩書に見え、やがて父と兄とを救つて兄だけを救ひそこねたとする天妃顯聖錄を通じて、使錄より四十年ほど後の娘媽山碑記になると、兄を救ひそこねた悔しさで神たらんことを誓つて投身した、といふ風に發展して行つた

李 猷 璋

ので、通官の説はその中間の過程を示すものと思はれる。⁽¹⁾しかし、ずつと莆田林氏と傳承されて來た媽祖を「姓蔡」と云ひ、梅花所の人だとしたのがひとつもないのを見ると、これは類似點を有する郷土神と混亂してしまつた地域的な現象であらう。謝必振といふ人は琉球國志略^{卷三}封貢大清順治三年の項にも「福建平、尙賢請封。使者與通事謝必振等至江寧、投經洪承疇、轉送入京。」とあるやうに、もつばら琉球封貢などの事務に携つてをり、遭運守護神については最も詳しかるべき立場にゐながら、さう思ひこんで怪しまなかつたのを見ると、明末清初の頃には限られた範圍に相當深い混亂があつたことがそれによつて窺はれる。然らば媽祖に紛れこんだのは果してどんな神であらうか？

媽祖（『天妃』）と結びついた蔡氏といふ神は、姓氏や場所および傳説の内容から見て、それが梅花所に廟のある、俗に琉球蔡姑婆と稱する女神に疑ひないことは、閩都別記の當該記事を一瞥すれば容易に知り得られる。何求の閩都別記が傳へるのは、十八世紀前半の説話であるが、

長樂蔡氏世官於琉球。萬歷代、耳目大夫蔡金城有女曰

（尊）

紅亨。年十六、能神遊海上、頃刻千里。其匪常出汗。姊見撼之。醒曰：姊斷却數十性命矣。問其故、曰：某處海船遭風將覆、妹與神戰、已獲勝。今醒、彼豈饒諸船乎。姊告於父、徵之信。一日於海上遇臨水夫人、遂請執業。夫人許之。未幾、封王之中使至。聞其異、挈之歸朝。抵長樂。紅亨謁蔡氏祖祠、與族人叙昭穆、乃蔡氏之姑也。少頃、出至海濱、有巖谷若龜者、紅亨遂坐其中。族人異之、乃其肉身塑像焉。自是行船遇風海上。呼蔡姑婆無不獲濟。⁽²⁾とある。右の記事を要約すれば、蔡姑婆が琉球官の娘だといふ出自と、元神を出して難船を救はんとして仕損ねたといふ神異譚と、臨水夫人に弟子入里したこと、及び後、中使によつて長樂へ連れ歸られ、そこに祠祀されるに至つた奇蹟やその後の信仰ぶりなどが物語られてゐる。出自の如

き史實に係はる考證は後節に譲り、他の傳説から見て行くに、睡眠中に「元神を出して」顛覆せんとした海船のため、風神と戦つてゐるところを呼醒されて失敗した話は、云ふまでもなく三教搜神大全「天妃娘娘」以来の媽祖傳説に出てゐたのを取入れたものである。それが張學禮：使琉球録の、父のために海に投身して死んだ話と違ふやうになつたのは、閩都別記が琉球神道記の記載を承けついでだからであらう。何となれば、天妃娘娘々には「忽一日、手足若有所失」としかなく、救助對象も兄弟四人の肉親となつてをり、他の所傳も失神については、天妃娘娘傳・閩書・天妃顯聖錄・娘媽山碑記とも機織中の機上におけることとしてゐる。單純な晝寢中の出來事としてゐるのは琉球神道記ひとつだけである上に、救助對象が一般の船となつてゐるのも、「天妃娘娘々」の五兩の語を敷衍して四五商舡・五舡とした娘媽傳と、それを踏襲して五艘の船とする神道記だけである。さすればこの二點で閩都別記の所載と一致するのは琉球神道記の外にないが、更に閩都別記に、彼女を呼起したのが「姊」となつてゐるのは、神道記に見える「林二姐」の名から案出して、不適當な「父」に換へたらしいのを併せ考へ

ると、兩者の關係は一層確かめられよう。

ところで、なにゆえに蔡姑婆の傳説に媽祖の話が紛れこみ、兩者の間に混淆を來したか？ その契機は果してどこにあつたか、といふと、それは閩都別記の記事にかなり發達した縁起の奇蹟談が記されてゐる如く、長樂に廟ができたからであらうと思はれる。いま同治の長樂縣志 卷八、祠祀、里祀 によると、

蔡夫人廟在二十四都梅花澳。相傳夫人爲琉球國人。嘗夢神人書其掌中云：東湧起風沙，得道在梅花。羅白與金舍，相逢總一家。明萬曆間，因織龍袍入貢冊封，精巧妙明。懿德夫人召入京。舟次梅花，遇風登岸，寓宋直家。適朝命免進京，旋病卒。宋直葬之於馬鞍山。時顯英靈，土人立廟祀之。一在十四都旋峰山下。

とあつて、梅花にて得道することを豫言された琉球の織姫が召されて長樂の梅花まで來たが病歿し、屢々靈異を現はしたので、土地の人が祀つたものと云ひ、その廟は梅花澳の外、旋峰山にも建てられたと記してゐる。こゝに書かれた蔡夫人の傳説は閩都別記のとは全然違つて、織姫に始終してをり、未だ海上に顯靈することも、媽祖と混線したや

うな話も全く見えないので、豫言の外は古い話を傳へたものであらう。詳しくは後に至つてまた論證するつもりであるが、蔡姑婆が媽祖（『天妃』）と混線したそもそののはじまりは、廟が長樂にあつて琉球往來の人々に信仰された上に、彼女がもと織姫であつて「天妃娘娘」における媽祖の傳説と似てゐるところから起つたと思ふのである。

×

蔡姑婆が長樂の梅花澳に祠祀されるに至つた経緯について、閩都別記には「長樂に抵ると紅亭は登つて蔡氏の祖祠に謁し、族人と昭穆を叙したが、蔡氏の姑であつた。しばらくして海濱に出たら龜のごとき巖谷があり、紅亭はその中に腰をかけた。族人が怪んでゐると、それは彼女の肉身の塑像であつた。」の一節がある。これは「蔡姑婆」といふ神の呼名を説明するためにできた話であらう。長樂縣志には「ついで病卒し、宋直が馬鞍山に葬つたところ、時々英靈を顯はしたので、土人が廟を立て、祀つた」と素朴な事情を記してゐる。宋直とはどんな人であつたかは知る由もないが、馬鞍山は縣志 卷之 三の地理山川に「在二十四都……又有馬鞍山、挺生海濱、形如螺。又名田螺礁。潮退時、土人

輒到此採取海物。」とあるのによつては、想像せられよう。同じ縣志^{卷八}の祠祀、墳墓の項には蔡夫人墓があつて、

蔡夫人墓、在梅花馬鞍山八寶坑、相傳葬時風雨大作、

次日失其所在。但見土邱環水而已。俗號田螺穴云。互見里祠。

と見え、蔡夫人廟の記事を裏書するやうな遺蹟があるが、たゞこれは事實とは認められぬ上に、最後に「互見里祠」と附加へてゐる如く、蔡夫人廟とは同じ編纂者の手に成るものだから、傳説としてもどの程度に語り傳へられたか、少し疑問なきを得ない。蔡夫人廟の條には特に珍奇な傳説は出てゐない代りに、蔡夫人が曾て夢に神人がその掌中に書いたといふ、「東湧起風沙、得道在梅花、羅白與金舍、相逢總一家」の豫言が載せてある。これが同じ記事の他の點と別に作られたことは、文中の病卒と矛盾し、却つて閩都別記の緣起談に合致することからも知られるので、恐らく廟祝か廟にまつはる道士たちによつて作爲されたものと考へられる。さて、東湧とは東涌山のことで東引山とも稱される、霞浦縣の東南海上に浮ぶ島。閩江を距る七八十里の琉球入閩の水路に當るところである。風沙はむしろ陸上の

描寫にこそ適當な語詞を押韻のために用いたものなので、前二句の意味は、東涌山で風波が起るに會うて、梅花あたりで得道して神となるであらう、といふこと。次の羅白と金舍はひどく隱語の表現を取つたらしいので、よく分らないが、結句の出逢ふ者は何れも内の人に外ならなかつたといふのは、やはり暗に蔡姑婆の名の起源説明を含んでゐると看做されよう。さすれば、豫言の目的が祠祀の緣起と神名の由來を説明すると共に、祀られることの偶然ならざる證據を示して廟神を權威づけるために作られたのは疑ひない。

長樂縣志の蔡夫人廟の記事をたぐつて見るに、省府志に全然見えないばかりでなく、弘治・康熙・乾隆の長樂三舊志とも所載がないので、同治志が初見であることがわかるが、それにも拘らず、例へば張學禮・使琉球錄にすでに「爲父投海身亡」といふ通官謝必振説が出てゐながら、縣志では單に「病卒」とあるに止まつてゐるのが注意せられる。勿論、蔡夫人廟記事にも細い（が、重要でないといふのではない）點で相當進んだ話もあるが、物語としては、後からくつつけた豫言を除いて、少くとも骨格は大體オリヂナルな形を保つたものゝやうに思はれる。その資料が直接に何

處から出たかは分らないが、琉球にもこれと似た傳説の記録が延享二年の編纂に係る鄭秉哲：球陽外卷遺老説傳に、

往昔之世、琉球貢物内有花布。細嫩奇巧、美麗絕倫。

蔡夫人之所織也。嗣後、夫人奉命入京。舟至長樂縣、蔡

夫人病卒。皇下勅建廟于長樂縣、題曰琉球蔡夫人之廟。

屢有靈効。至今每月布司發賜廟米九斗、著爲定規。但人

煙世遠、爲某之女、爲何入京、莫從詳考。

と見えるのは參考せられよう。球陽の説傳は成書年代が早
いだけ話の内容も概して素朴であるが、話が同じ系統のもの
を引いてゐるのは一見して明らかであらう。しかし、さ
うは云へ、よく見れば兩者の間にもいろいろの差異が現は
れてをり、例へば球陽では蔡夫人の時代を往昔の世としか
書かれてゐないのに、長樂縣志では明萬曆間とあり、また
一方では奉命入京としながら「爲何入京」は稽へるに由な
しといふが、一方では龍袍を織るために入京したと明記し、
懿德夫人に召され、また朝命によつて上京を見合せたこと
などまで記してゐる。廟については前者では官府の優待に
重きを置くのに反し、後者はむしろ民間における信仰の發
生を自然に書いてゐるといつた具合なので、比較對照して

考察する必要があらう。

×

こゝでは蔡姑婆の年代や出自に關することは暫く措いて、
その他の點から檢討をはじめめる。第一に彼女の入京目的に
ついて、球陽の遺老説傳では「何の爲に入京したのか、詳
考するに由なし」とあるが、その全文をよく讀んで見ると、
「球陽貢物の内に花布あり、細嫩奇巧、美麗絕倫、蔡夫人の
織るところなり」と書いて、直ぐ「嗣後、夫人命を奉じて
入京」すと續いてゐるのは、長樂縣志に「因織龍袍入貢冊
封」とあることから考へても、元來は、織物技術で召された
といふ話があつたと解せねばならぬ。たゞ、織物について、
縣志の方に龍袍とあるのが、説傳に花布と傳へられたのは、
何らかの事實を反映する傳説として花布が素朴であるのと、
話は縮んで來るよりも大げさに敷衍されて行くものが多い
ことから推して、われ／＼は球陽の説傳がオリヂナルな形
で、縣志の龍袍は發展したものと思はれる。琉球人は孤島
の誇るべき民藝品に對してこまやかな愛情をもつてゐたの
で、それを織造した腕前で召されたとしても何ら不自然を
感じなかつたけれど、さういふ生活感情を持たぬ大陸の人

人にすれば聊か子どもじみて物足りないのは當然だから、何かのきつかけで話を變へてしまつたのであらう（そのきつかけについては後節参照）。さるにしても縣志が特に「懿德夫人召入京」と書いてある懿德夫人は、皇后であるべきなのに、明朝にはそんな皇后が見當らぬので、后妃の資質を讀へる定り文句の「懿德」を無雜作に用ひただけで、具體的な皇后を念頭に置いて書いたのではなからう。

次にいはゆる蔡夫人が病卒するまでのことが、説傳ではあつさり舟が長樂縣に至つて夫人病卒す——としてゐるのに、縣志には長樂がヨリ具體的に梅花とあつて、そこで風に遇つて上陸し、宋直なる者の家に宿つたが、上京しなくてもよいとの沙汰があり、旋いで病卒したとある。梅花は蔡夫人廟の所在地ゆえ、祠廟にまつはる記録や細い説話が餘計に傳へられるのは當然で、縣志にだけある神人の豫言も、畢竟、かういふところから生れたのは云ふまでもない。が、祠の成立につき、縣志に馬鞍山に葬られた後、屢々英靈を顯はしたので、土地の人が祠廟を作つて祀つたと素直に記してゐるに引換へ、説傳に、皇下が勅建したといふ空想的なことを記し、布政司から月糧の發賜を受けたといふ

ふ平凡なことを麗々しく書いてゐるのは、長樂の人が祠廟を目の前にして、比較的事實に即した考を持つことができたが、琉球の方では説傳の文末に「然女人之身、永奉大邦尊信、誠係異事。故記以垂于後世焉。」と見える如く、畏れ多い驚きの心理を以て、その事蹟を大げさに想像してゐたことを反映したものであらう。

×

以上を以てわれ／＼は關係文獻に出てゐる箇々の記事につき、それがどういふ性質のものであり、あるいはどんな意味をもつてゐるかを考へて來たが、今度はこの批判された資料に基いて、蔡姑婆傳説の形成と發展の徑路を逆に溯つて見なければならぬ。

蔡姑婆傳説の直接資料によると、彼女の年代について、球陽の遺老説傳には「往昔之世」のこととし、すべてが「人煙りて世遠く、某の女たりしか何が爲に京に入りしか、從つて詳に考へるべくもない」と書いてゐる。いはゞ球陽が編輯された十八世紀の半ばころの琉球では、蔡夫人の話がそれはど遠のいた昔の傳説となつたことを示すものであるが、われ／＼は暫くそれを書かれたまゝに受取つて論述を

進めて行かう。ところが、球陽と同じ時分に書かれた閩都別記には「長樂の蔡氏は世々琉球に官たり。萬曆の代、耳目大夫蔡金城に女ありて紅亨と曰ふ。年は十六、能く海上に神遊し、頃刻にして千里……幾ばくもなく封王の中使至り、その異を聞き挈へて歸朝せり」と詳しい話があり、百年後の同治長樂縣志にも、内容はかへつて素朴な球陽の説傳と同じ系統のものを引きながら、「夫人は琉球國人と傳ふ。明萬曆の間、龍袍を織るため冊封に入貢す。…舟、梅花に次ぎ、風に遇ひて岸に登る…」とある。兩書の物語は全く話が違つてゐるが、蔡氏を萬曆の人とした點だけは一致するので、福建の方ではすつとさう傳承されたことが知られる。これは事實を示すといふより、その頃に梅花所に廟祀されたことからできたものであらう。傳説がある時間かゝつて民衆の信仰となり、それが祠祀の如き具體的な形に發展すると、今度は知らず識らずの間に祠祀を據りどころ、或は出發點にして新しい傳説が生れて來、祭神の年代も更新される場合があるので、閩都別記と長樂縣志における蔡氏の年代もかやうな例のひとつに數へられよう。

明は、周知の如く、洪武三年二月に明州・泉州・廣州の

三市舶司を設け、なかんづく泉州を以て琉球船に對したが、成化五年には番舶が福州に入るのが多いといふ理由で市舶司の移轉が決定し、間もなく福州へ移つたので、その後の明琉間を往來する船は當然、福州から出入した。長樂の梅花澳は實に閩江口の盡頭に當り、郭汝霖使錄・蕭崇業使錄とも「梅花開洋」とし、夏子陽使錄には「自梅花所開洋」、また杜之策：從客胡靖錄と張學禮使錄にも「梅花開洋」とあるやうに、福州から大洋へ出る最後の離陸地點であつた。必然、琉球關係の衙役・水夫・商賈がそこへ集り、從つて地方生活も琉球と密接に結びついたものになつてしまふのは云ふまでもない。蔡姑婆はかういふ環境の下にもたらさるべくしてもたらされたのであらう。如何にして長樂へ來たかについては、球陽に「命を奉じて」とし、長樂縣志には「龍袍を織るため冊封に入貢する」とあり、割合に古い話らしいのを傳へてゐるに對し、閩都別記だけに冊封使が連れて歸つたと書いてゐるのは新しい話と思はれる。萬曆に渡琉した冊封使は、七年の蕭崇業・謝杰と三十四年の夏子陽・王士禎の二回であるが、あひにく謝杰は長樂の人なので、琉球蔡夫人廟の創建（それとも擴新）には大きい役

割を果したと考へなければならぬが、閩都別記の傳説もこんな事實を反映してできたのではあるまいか。

×

さて、長樂の梅花所に祠廟ができ、琉球關係者をはじめ、その他の海に生きる人たちに信仰され、信士の祈願によつて、次第に航海守護神化するの自然の勢である。諸資料に現はれた傳説變化の前後關係から見ても、蔡姑婆が長樂へ傳來した當初は球陽の説傳や、それと同じ系統の話を傳へた長樂縣志蔡夫人廟の記事に出てゐるやうに、織姫であつたに疑ひなからう。それは兩者の物語に未だ媽祖と紛れた話も、航海に係はる要素さへ全く見えてゐない點だけでも、かなり古い説話を傳へたことがわかるが、また長樂に祠祀された後、媽祖の、元神を出して難船を助けたといふ神異譚を取入れるやうになつた理由のひとつは、恐らく彼女がもと織姫であつたことが、媽祖の神異を願した時も機織中であつた、といふのに類似してゐるところから起つたらしいことによつて推察せられる。蔡姑婆の航海守護神化と、ついで行はれた媽祖との混淆は、張學禮の通官謝必振が「天妃は蔡と姓し、此地の人。父の爲に海に投じて身

を亡くし、後に天妃に封ぜられる」と云つたやうに、清初には混亂の甚だしいものがあつたが、この簡単な言葉から推測し得る限りでは、多分閩書の系統が紛れこんだのであらう。たゞ謝通官の話し方全體を吟味するに、傳説の中にひとつふたつの要素が紛れこんだといふよりも、蔡姑婆をすつかり天妃に錯覺してゐるが、それは元明の間に媽祖が唯一の航海神として崇拜されてゐたので、封號の天妃が普通名詞化したために感違ひしたものであらう。

しかしながら、蔡姑婆の信仰が航海神化するにつれて、他の話を取入れて混淆してしまつたり、或は敷衍されて自然に發達したりして行つたのがある一方、さういふ動きに影響されずに、何時までも彼女を織姫とした古い話を保ちつゝけて語り傳へられたのがあつたことは言ふまでもない。前者は通官謝必振説の如きものから、後にますます演進して閩都別記に現はれるやうなものとなり、後者は球陽に載せられた遺老説傳の資料となつた話で、後に多少の潤色を経て長樂縣志蔡夫人廟記事に見えたものである。球陽の遺老説傳といふ名目が示すとほり、琉球の古老の間に遺された口碑であるが、その説傳内容を見ると、冒頭の蔡夫人

が琉球進貢品の花布を織つた云々の四五句を除けば、殆んど長樂でのことばかりで、特に廟に關する物語が大部分を占めてゐる。かういふ話が琉球に發生するわけではないので、恐らく蔡夫人廟の方から傳はつたものと思はれる。後に至つて明らかに如く、この琉球の織姫は、琉球にも別の處で歴史的な記録が残つてゐる具體的人物に當るらしいので、貢物のきれちを織り、それで召されて入京したといふやうな話は、恐らく琉球に生起し傳へられてゐたものと思はれる。ところが、一旦、長樂へ傳はつて年代が經つた後、そこで面目を一新して逆輸入されると、かへつて見當がつかなくなつたと見え、「莫從詳稽」のこととして、記事を遺老説傳に入れねばならなかつたのはそのためであらう。

一方、通官謝必振説の系統の話は、變化發展して閩都別記になると、或る種の事實に附會した、もつともらしい身上話を書き出されると共に、反面では織姫の話がかへつて跡方もなく消え去つて、物語は琉球神道記「天妃事」から取入れた、元神を出して難船を守護せんとした神異談の一節と廟祀されるに至つた緣起の奇蹟譚の一節とが中心になつた。これは、一にはすつかり航海神化し、機織の要素の

必要性が薄らいで、琉球神道記の話を受入れたのと、當時「蔡姑婆」なる呼名が親まれて神名説話が出来てゐたことを示すものであらう。蔡姑婆なる神名が何時ころからあつたかは明確に知りがないが、閩都別記の書かれたとき、すでに「海上に風に遇つたとき、蔡姑婆を呼べば濟を獲ざるなし」といふほどになつてをり、姑婆を説明する爲の説話さへ發生してゐたのを見ると、その成立がすつと溯れるのは争へなからう。閩都別記には、また海上にて臨水夫人に弟子入りを請ふて許容された云々の一節があり、同書の臨水奶の項にもその部屬たる十二娘奶の一人として名を列ねてゐる。これは勿論、福州周邊の信仰界をリードしてゐる臨水夫人の威勢を示すもので、近人魏應麒編：福建三神考臨水夫人の項によれば、彼の所有する「請奶過關寶卷」にも三十六婆官の中に蔡姑婆が見えてゐる。かくて、琉球からもたらされた、この外來の女神は福建の民間信仰に溶けこんで行くのである。

最後に閩都別記に出た蔡姑婆の出自について考へるに、長樂の世々琉球に官たりし蔡氏とは、唐營の蔡氏を指すものであらう。彼らはもと晉江縣「惠安」人であつたが、歴

代寶案

一集卷十七、天
順八、八、九

の蔡環咨文に見えるが如く、その父

の譲は福州府高惠里にて妻を娶り、房屋を買取つて住み、

男兒ひとりと共に永樂縣に入籍してゐたといふので、琉球

の世官で長樂に住んでゐた者はこの蔡氏に外なるまい。蔡

溫・程順則の中山官制によると、琉球では正三品の耳目官

と従三品の正議大夫があつて、進貢使として遣はすときは、

正議大夫に耳目官の頭銜を加へて行かせる場合が多く、蔡

氏一族で言へば、嘉靖三十年に蔡廷會、萬曆ではその三年

に蔡朝器が進貢船に遣はされてゐるが、蔡金城なる名の者

は前にも後にもなさうである。もつとも、閩都別記より

少し前に作られた蔡溫自叙傳によると、蔡家は九世の錦に

至つて嗣子がなかつたために、同じ三十六姓の一たる吳江

梁姓七世澤民の次男鐸が入つて養嗣子となつてゐる。この

鐸が蔡溫の父聲亭先生であるが、鐸の實父で蔡溫の血縁の

祖父に當る梁澤民は通事カナグスクベーチンであつた。琉

球では唐名は公文書にしか用ひず、通常は童名か王から貰

つた采邑の名を以てする家名を用ひるが、カナグスクは漢

字で「金城」と書くので、それが傳はつて「蔡金城」とし

て取入れられたのではないか、とも思はれる。いづれにし

ても、それが史實ではなく、何求によつて恣意にこじつけられたものであるのは云ふまでもなからう。

×

然らば、蔡姑婆とは實在の人物であつたかどうか、また、その傳説はどういふ史實に由來してゐるだらうか。屢々觸れた如く、球陽の遺老説傳では蔡夫人の身元について、彼女を琉球の貢物だつたといふ「細嫩奇巧、美麗絕倫」なる花布を織つた者だとしてゐる。長樂縣志では「花布」が龍袍になつてゐるが、いづれにしろ、織物技術のことは蔡姑婆物語のできた最も肝腎な萌芽であり、その點から稽へて行くのが順序であらう。いはゆる「花布」については、從來、種々の解釋があつて、たれにも先づ結付けて考へられがちなのはピンガタである。鎌倉芳太郎氏は「琉球美術工藝に就きて」の中に「紅型の古記録に現はれたのは、…首里王府にて編纂せられた遺老説傳に『往昔之世、琉球貢物内有花布、細嫩奇巧、美麗絕倫、蔡夫人之所織也…』とあるに始る。これは明書にあつた記録を大宗蔡氏儀間家の家譜の蔡夫人廟緣由中に引用し、これを更に遺老説傳に採録したもので、冊封使等の詩文にも澤山出て来る花布又印花

(啓明會第十
五回講演集)

布とは明らかに染物であり、所謂紅型である。」
 (要約)と述べてゐる。しかし、説傳の文を「明書」「蔡氏家譜」から採つたといふのが事實に相違する上に、推論の過程も素朴すぎて人を納得せしめる根據が全くないので、論外としてよからう。これに反して伊波普猷氏は「古琉球紅型解説」において、遺老説傳の記事につき「蔡夫人之所織也」といふ文句から判斷して見ると、これは俗に花織即ち浮織と解するのが穩當のやうに思はれる。この蔡夫人は明の洪武二十五年に歸化せる閩人として二三代後に生れ、祖國の浮織を麻布や焦布に應用して琉球的特色を發揮させた名機織と見ることができよう。」と云つてゐる。われ／＼は、主要なモチーフに係るのを除いて、必ずしもさう嚴密に傳承記録されとは限らぬ説傳の中の、片言隻語を唯一の根據にして當てすつぼうする論法に服しがたいばかりでなく、琉球國舊記^{卷四}事始^{卷六}の浮織の項と球陽^{卷六}尙眞^{卷六}國吉の項とに見える、國吉なる者が浮織を學んで來て織始めたといふ傳説の年代と齟齬し、その浮織が貢物にされたといふ事實もないことから、到底、伊波説を採用しかねるのである。然らば、われ／＼は何よりも蔡夫人が織つたといふ「花布」が

果して存在したか、存在したとすれば、それはどの裂地に擬定されるべきか、を尋ねねばならぬが、それには、まはり道のやうでも、まづ「花布」の語が元來どういふ品を指すに用ひられて來たかを調べる必要がある。

花布は、古來いろ／＼な種類のもを指すに用ひられてゐる。例へば、范曄：後漢書^{列傳第七十六}西南夷傳^{哀牢夷の條に、李}

賢が「帛疊」に注して「外國傳曰：諸薄國女子織作白疊花布」と引いてゐる吳時外國傳のいふ「花布」は、織作とあるので、筋の入つた紋樣織のことであらう。白疊とは木棉

「布」の意義を持つペルシャ語 basket の譯音で、諸薄國

とは、勿論、良質なサラサの產地として有名な Java のことであるが、郭義恭：廣志にも「白疊布毛織、出諸薄國」とあつて、當時すでに白疊の花布が中國にも知られ、盛ん

にもたらされたのである。しかし紋樣織の綿布は、また斑布とも云はれるらしく、太平御覽^{卷八二〇}布の條に「南州異物志曰：五色斑布、以〔絲布〕古貝木所作、……治其核、

但紡不績、……欲爲斑布、則染之五色、織以爲布。」と引かれてゐる萬震：南州異物志、及び梁書^{卷五十四}海南諸國傳^{林邑國の條}

に「又出吉貝……其華成時如驚鵩、抽其緒紡之以作布。亦

染成五色、織爲斑布。」といふ記事はその例であらう。林邑國とは Campa のこと、吉貝は Bahnar 語の Kopaik から來た、木棉を意味する言葉だと云はれるが、斑布は勿論紋織物にのみ用ひられるとは限らぬ。たとへば周去非：嶺外代答^{卷六}器用門に見えてある猪斑布は、その「猪人以藍染布爲斑。……其法木板二片鑲成細花、用以夾布。而鏹蠟灌於鏤中、而後乃釋板取布、投諸藍中、布既受藍則煮布以去其蠟。故能受成極細斑布。」といふ説明によれば、明らかに縹縹染に疑ひないのに、やはり斑布としてゐる。斑は原來まだらな色・紋様を指すので、同書の西南夷に關する記事に見える「大率推髻銑足、或衣斑花布」のやうに斑花布とも出てゐるのである。梁書の林邑國と同じ所の産物について述べた宋、趙汝适：諸蕃志の占城の條では「土地所出吉貝花布・絞絲布・白蠟簾」と花布になつてゐる。（なほ、この吉貝花布を Hirth and Rockhill, Chau Ju-kua では "ki-pei cotton, figured cotton" と譯し、馮承鈞の諸蕃志校注にも「吉貝・花布」と二語に讀んでゐるのは誤解も甚しく、上記の白疊花布や異物志・梁書の説明に倣しても、吉貝の花布と一語にすべきは疑がない。）この吉貝花布は

前の文獻とは時代がかけはなれ、直ぐ後の島夷志略^{占城條}にも「地產打布」と打布すなはち白疊ひとつしか記されてゐないので、織物であるか染物であるか、斷定しかねるが、瀛涯勝覽には布の出産にこそ觸れてゐないけれど、「國王身穿五色線紬花番布長衣、下圍色絲手巾。婦人：下圍色絲手巾」と見え、服裝が未だ殆んど五色線・色絲ものであることから推すと、吉貝花布はやはり紋織のやうに解せられる。諸蕃志には占城の外に、藍無里國の條に「其王：只纏五色布」、闍婆國の條に「有雜色繡絲、吉貝絞布」、南毗國と胡茶辣國との二條とも「土產諸色番布」、注釐國の條に「土產細白花蕊布」など、筋や紋様の入つた布地の記載が見えるが、花布の語は用ひられてゐない。ところが元の汪大淵：島夷志略になると、「花布」やそれに類似したのがいろいろ出てゐる。いま便宜上、それを地域的に列べて例示し、私見を加へて見る。

1、占城 Campa——地產打布……貨用酒花布。

賓童龍 Panduranga——貨用印花布。

民多朗 Panduranga——地產木棉花、貨用闍婆布。

青布。

羅斛 Lacoc——貨用花印布。

暹 Siam——貿易之貨用青布。

2、丹馬令 Tambralinga——男女繫青布縵。貿易之貨用甘埋布・紅布。

吉蘭丹 Kelantan——貨用塘頭市布・占城布・紅綠縐。

針路(?)——貿易之貨用花布・鼓青布。

3、麻逸 Mait=Mindoro——地產木棉……花布。

三島 Philippines——地產木棉花布、貿易之貨用小花印布。

4、三佛齊 Jambi——貿易之貨用絹……花布。

日麗 Dili——貿易之貨用花布……小印花布・五色布。

5、闍婆 Java——地產極細堅耐色印布。

遐來物 Karimun Java——男女繫青棉花梢、貨用占

城・海南布……五色布。

琉球 Formosa——男子婦人拳髮、以花布爲衫。

右の内、南海に出産するものとしては、インドシナ半島にある占城の打布を除けば、フィリッピン群島に屬する麻逸の花布、三島の〔木棉〕花布、及びジャワ島(闍婆)の、特に極細堅耐と形容された色印布があり、なかなつく占城・

闍婆の布などは昔と相も變らず交易によく用ひられたのは記事に出てゐるとはりである。また貿易用の品としては、占城むけに酒印布(酒は色か、花の譌か)、賓童龍に印花布、羅斛に花印布、針路に花布、三島に小花印布、三佛齊に花布、日麗に花布・小印花布・五色布、遐來物に五色布を用ひたのが數へられるが、それらが果してどんな布であつたかは、實證的に究明する手がかりが得がたい。原語を寫したのでも、説明がついてゐるのでもないだけに、南海關係資料の譯注・考釋を試みられた東西の諸先學が何れも納得せらるべき具體的比定をなしてゐないのも、そのためであらう(本節の附記參照)。

さて、「花」の字がつく布と他の布とを比較して違ふところは、占城布・溜布・甘埋布・闍婆布などのやうに出産地を示し、打布・白疊・吉貝・兜羅綿などのやうに材料の原語を示し、或は絹布・縵布などのやうに、用途による特有の名詞でもなく、主に布の筋や柄などのいはゞ紋様に對する名稱として用ひられることであらう。それは、「花」が原來、「花道兒」「花樣兒」「五花十色」の如く、あや・紋様を表はす言葉からして當然であるが、島夷志略に見える花布

の名を整理して見ると、ざつと、

花布、印花布・小印花布、花印布・小花印布、色印布。

(占城むきの酒屋布あるひは酒印布は暫く措く)

といふ風に、單に花布とあるのと、それに「印」の字のついたのと、の二種類に分けられる。花布はともかくとして、「印」の字がついたのは、紋様が捺染などの方法によつて布に色を摺りこんだものを指稱するに違ひなからう。たゞ島夷志略に出てゐる、三島の「地產木棉花布」といふのが、星槎勝覽では單なる木棉布に書かれ、附録の詩に「布染花生彩」とあるによつて、僅かに染物だとわかるものもある。貿易之貨で、賓童龍の印花布とあるのが星槎勝覽では單なる花布となつてをり、暹の青布が印花布、三佛齊の花布が(舊港に)五色布と書きかへられてゐる。また、瀛涯勝覽の占城國の條に「婦人〔下〕圍色絲手巾」とあるのが、星槎勝覽では「腰圍花布手巾」朱本・景本
色布に作るとある。それは全部が全部、時代による用品の變化とは受取りがたいので、「花布」なる名稱の意味するものは甚だやゝこしいと云はねばならぬ。南海の產物と貿易品との記録の内でも、諸蕃志には、一二、布名づきでしか出なかつたのに、島夷志略に至

つて數あまた現はれ、瀛涯勝覽にはまた見えなくなつて、

星槎勝覽になると再び多く出現してゐる。これは諸蕃志から島夷志略の間に、言換へれば元一代に中國對南海の通交が發展し、實際にたくさん南海へもたらされたことを反映したのと、星槎勝覽が島夷志略を抄襲したことにもよらうが、花布といふ語が、もと／＼「素」に對立するすべての染織ものを泛稱するもので、概念が漠然としてゐて實物の特殊性を明確に示す言葉でないため、その場／＼便宜的に用ひられるところから來たのでもあらう。西洋朝貢典錄は繡纂物であるが、それには占城國第一に紅印花布と圓璧花布が出てゐる外は、島夷志略・星槎勝覽の所載を襲つた蘇(小)祿國の水印花布が見えるだけである。殊に東西洋考の西洋列國考の條では竟にひとつもなくなり、僅かに外紀考の日本(小)の條に、物產のひとつとして「花布」景初二年獻班布
宋時獻白細布と見えてゐるのに止まるが、これは明朝に對する日本貿易品より考へて、多分絹の紋様染物に違ひないと思はれる。以上の例をとほして、「花布」なる言葉は、淳熙三山志卷三十九
土俗類一の紅蕉花布や前記星槎勝覽舊港
の條の五色布の如き單なる色ものを指し、吳時外國傳の白疊花布や瀛涯勝覽占城國
の條の色絲手巾

の如きシマ・紋様の織りものを示し、また五彩を以て種々な圖案を捺染したサラサや花紋などをプリントした、いはゆる印花布の略語としても用ひられることがわかつた。王圻：三才圖會や事物紀原の類には固よりのこと、近時の辭源・辭海から國語辭典に至るまで「花布」「印花布」なる詞彙を収載してゐないのも、その意味が曖昧で熟語と認められがたかつたためによるであらう。

附記 Rockhill は島夷志略の譯註において、上に舉示した印花布を Chintzes とし、花印布を Cotton prints、花布を Coloured Cotton stuffs、小花印布を small figured chintzes、小印花布は little prints、色印布は Coloured Cotton prints、五色布は Coloured Cottons といふ風に譯してゐるが、一々の違つた説明に彼の細かい苦心を汲みとることはできても、その區別に確かな根據があるらしくは見られぬと思はれる。印花布を chintzes、花印布を Cotton prints にして、ありふれた前者を常識に従つてさらに擬定したので、後者をプリントにしたのは理由なきことであらう。殊に印花布に「小」のついた小印花布を奇怪にも little prints と譯した代りに、花印布に「小」のついた小花印布を却つて small figured Chintzes に當てたのは、アヘンへの感を抱かせられる。

x

翻つて琉球關係の資料を検査するに、尙徳王が朝鮮から

寄こされた「厚儀」に對するお返しとして、成宗あて成化六年四月一日つき咨文と共に新右衛門尉義重の歸航の便に託した數多くの禮物に、

濶綿布二匹・色線花布二匹・粧花瞭爛二匹・棋子花異色手巾二條・彩色縣手巾二條・綿布染花手巾二條・御磚増長錦二匹・織金孔雀青緞二匹。

の織物があるが、その中に「色線花布」といふのが見えてゐる。李朝實錄に残れる琉使と自稱した道安や、普須古・蔡環の談話記錄と、成化十三年に濟舟島から漂流して同十五年に送還されるまで二年以上も琉球に留まつた金斐らの口供に「無麻・木綿、亦不養蠶、唯織苧爲布。…作衣…染用藍青。婦人…裳亦染青。」とある言葉によつて、當時の染織技術がわかるので、これらの布地が殆んど舶來品であることは疑ひない。それは錦と緞とを除けば、みな「花布」と稱し得べき種類のものであつたのに、獨り色線花布だけが花布と書かれたのは、恐らく他の布が染物ばかりであつて、「棋子花」「彩色」「染花」と書けたのと、殊に何れも「手巾」の如き製品になつてゐて「布」でなかつたためであらう。ともあれ、色線花布については「色線」といふ以上、

織物であつたのは疑ひなからう。

琉球が南海諸國と通交しはじめたのは洪武年間であるが、成化十七年□月□日つき琉球王にあてた暹羅國長史蕭奈らの回賜禮物として、「上水花布一十條」とある咨文が残つてゐる。上水とは馬驪の瀛涯勝覽暹羅國の條に「國之西南去百里、有一市鎮名上水。此處有番人五六百家。諸色番貨皆有。」とだけあつて、比定すべき場所は未だ明らかでないが、要するにシャムから花布と稱するものが十枚もたらされたのである。シャムは南海の内、東洋諸國と最も長くしかも盛んに貿易をした國で、十六七世紀の交には日本にはいつたサラサを、寛永に出た毛吹草には「紗羅染シャム」としてゐるのを見て明らかなやうに、染織品も相當に持込まれた。しかしながら、琉球産の木棉紉が、薩摩を経て諸方に販賣せられたために、薩摩紉といはれるに至つた例もあるやうに、日本の方でそれをシャム口染と呼ぶのは、必ずしも暹の產物とは限らず、暹から來たといふだけのものでもよい。サラサは元祿の合類大節用集卷第六服食門には印華布、また正徳の和漢三才圖會卷二絹布類には華布とも當てゐるが、島津重豪命編の南山俗語考卷五衣飾部を見ると、印花布には

カタツキ、花布にはハナヌノと註してゐる。以て當時の兩國貿易業者の共通の概念としては、サラサを〔印〕花布とは云ふけれど、〔印〕花布が直ちにサラサを意味しないことが知られよう。それに引換へ、暹の方から「上水花布」と名乗つて來ると、上水の產物としなくてはなるまいから、意味が違ふとも考へられる。元明以來の南海關係資料に、暹の產物として花布と稱し得べき染物、物が擧げられた例がなく、「上水花布」を俄かにサラサと斷定することは躊躇せられるので、果してこの「花布」とはどのやうなものであつたかは分らない。

琉球土產の染織品が「花布」と指稱された例は球陽の遺老説傳以前にはないが、その五十年後の乾隆五十九年に冊封副使として渡琉した藍鼎元の使録にひとつ用ひられてゐる。彼は「十九日取視昨所購布、一米色曰蕉布。一白而細者曰苧布、一白綿軟者曰絲布、一一米色而粗者曰麻布」と、周煌：使録と似たことを記したのにつき、

國人善印花、花樣不一。皆剪紙爲範、加範於布塗花焉。

灰乾去範乃著色。乾而浣之、灰去而花出。愈浣愈鮮、衣敝而不褪。此必別有製法、祕不語人。故東洋花布、特重於

閩。

と、製法まで紹介してゐる花布がそれである。この花布は作り方が完全に一致することから推して後に名品となつたビンガタであるのは疑ひない。しかし、琉球の染物については一七六二年の大島筆記に「染工精巧なるはなき由、それ故大方島なり。此度も風呂敷を見たるに、上布を紺地に染め、梅の折枝に色取したる随分古風なる染なり。」といつてゐるので、ビンガタはその後に發達したもので、球陽のときには未だよい紋様染は出なかつたと考へねばならぬ。大島筆記が記す藍の染物は中國の民間に行はれる印花布を想像させるが、「精巧妙明、美麗絕倫」と形容されるほどのしろものでないのは明らかである。球陽と同じ年代の染織品は、その六十年前に渡琉した冊封使汪楫の使録に、

花紋之工而細者、皆機杼而製成之、爲己用、不相交易。とし、その十年後の周煌：琉球國志略にも、

皆花紋相間、綦組編爛。亦有五色染成者、皆以自服。若餽遺交易、槩用本色。

とあつて、染物よりも花紋を巧みに織つたものが注目を惹いたらしいが、たゞ「花布」とは書いてゐないので、さう

いふ種類の布をどう呼んだかは知り得ざるものである。

×

以上數節に亙つて球陽の遺老説傳に云へる、「花布」の意味内容をいろ／＼の方面から調べて來たが、その指稱する製品が定つてゐないので、それによつては何も究められぬことを知つただけであつた。今度は方面を換へて、琉球染織史上にそれらしい織姫の傳説はないかをさがして見るに、古くから織り用ひられたマアウー（苧布）には、おもしろさうし十四章に、花城はなす按司はなすつきの大親のひとり娘が白い織維を選つて布を織り、井かなに下りて經かきを整ふてゐたら赤頭あかづかと落合つて、戀仲になつた……云々を歌つたのがあるくらゐのもので、ユーナ（友納）黄櫨）や芭蕉布になると全く言傳へはない。たゞ、萬曆初年に苧布を改良して作り出した宮古のあやさび（紺細上布）については、下地眞榮が進貢船の難を助けたと褒美に地頭に任命されたので、その妻のいないしが織調へて尙永王に献上したのがお氣に入つて、それをみんなに作らせたのがはじまりだといふ傳説が残つてゐる（榮河氏家譜、及）。この外にも木綿は麻氏眞常が栽培に成功したのを、泉崎村に住んでゐた日本婦人の梅千代・實

千代姉妹がはじめて布に織りあげた話と、八丈織の袖は友寄なる者が尙豊王の命を奉じて久米島民に教へたものであることや、浮織は國吉といふのが中國人から教はつて傳へたものなどがあるが、蔡夫人とは縁が遠い⁽⁴⁾。ところが、何かを織りはじめたとか、織つたのが貢物になつたとかの如き、歴史的問題と關りあるやうには見えないが、蔡夫人との關係を思はせる記事が球陽に見えてゐる。云ふまでもなくその尙圓王紀に出てゐる蔡讓の女の亞佳度である。

球陽^{卷三}尙圓王紀の「蔡讓女亞佳度捐資建祠奉安神主」の項に、

唐榮通事蔡讓女亞佳度、及笄而嫁、孝事舅姑、順從其夫。未經數載、其夫去世。時亞佳度年十七、守義寡居、終無嫁意。……亞佳度紡績織紵、以爲恒業。歷年蓄積、至於成化壬辰、卜地于唐榮之東北、自能捐資創建祠堂、以安蔡氏神主。且亞佳度意思想宋朝忠惠公造萬安橋時、有觀音現聖而成此橋。至今海清國泰、而萬民免風濤險阻者、此誠忠惠公之功德、而觀音之所係也。由是、亞佳度奉觀音于祠堂、亦以崇信。亞佳度年五十一而卒焉。

とある。すなはち彼女が十七のときに寡婦となり、紡績を

恒業として蓄積を爲したと、及び自ら資金を捐て、蔡氏祠堂を建て、萬安橋における觀音の靈蹟を思ひ、それを供奉したことなどが載せられてゐる。記事の題目によつてもわかるやうに、祠堂創建の方に重きを置いて書かれてゐるので、紡績のことはちよつと觸れる程度に過ぎないが、祠堂の建設が一寡婦の紡績による蓄積の寄付でまかなはれたというのは、その紡績の力量を想像せしめるに足り、織姫であつたといふ條件の比重が言外に現れてゐる。球陽の編者はこれが同書^{外卷一}遺老説傳の蔡夫人と關係があるとは氣づいてゐなかつたらしいが、長樂がわの文献記載と思ひあはせれば、蔡讓女は實は蔡夫人の元型であつたと見做すべき根據があるのである。

蔡讓の女のアカトと蔡姑婆とは、何よりも同じ蔡氏の出身となつてをり、しかも同じ機織の秀れた婦人であるのが注意せられる。球陽に見える限りでは、一は具體的な年代を持つ史實、一つは傳説化された話として扱つてゐるので、ちよつと兩者の間に關係があるらしくは見えない。しかし、琉球の蔡氏といふのはさう範圍の廣いものではないし、遺老説傳に、貢物の花布を織つた女を蔡夫人と書いてゐるの

でもわかるやうに、それは長樂へ傳はつて蔡夫人廟ができた後、彼地で發展した傳説を逆輸入した話である。このことを考慮に入れれば、自然と解釋の仕方も變つて來よう。

例へば時代の差異について、蔡夫人が長樂の方で萬曆の者とされたのは、すでに觸れた如く廟の創建時期を神の生存年代にこじつけたものであり、球陽がそれを説傳に入れた上、蔡夫人をいつのたれだか知る由がないと云つたのは、僅か百五十年前のことながら萬曆に該當する史料がなく確信が持てなかつたためと推測せられる。この推測が肯けられるとすれば、同じ蔡氏の同じ織姫といふことは重要な意味を持つと思ふが、特に閩都別記にその長樂蔡氏を「世々琉球に官たり」と云つてゐるのは、蔡讓・蔡璟の唐榮蔡氏以外にないので、一層明らかである。また、これは同じく閩都別記に蔡夫人の名前を「紅亨」だとしてゐることからも知り得られる。紅亨は私見によれば、それはアカトの對音で、アカトといふ琉名を當時すでに琉球社會の支配的文字となつた日本式訓讀法によつて「あかとほる」に讀まれる「紅亨」に當てゝ譯したものと思はれる。勿論、普通は音による對譯が多いのに、誰がどうしてさういふ當字法に

よつて漢語の譯名を作つたか、に若干の問題はあるけれど、人が同じであることゝ、紅亨が譯名としてはきこちなくて譯語としか考へられぬこと、發音がアカトの訓讀と類似してゐることゝから、左様に推測するのである。なほ、長樂で蔡夫人廟の神を俗に「蔡姑婆」と呼んでゐる、その「姑婆」とは閩語において祖母の姉妹を指稱する言葉で、嫁入の婦人は兒女の用ひる稱謂法に従ふべき慣習だから、夫の父の姉妹にもさう呼ぶわけである。したがつてオールドミスでない限りは、一旦とついだ者が實家へ戻つて來たときに用ひられる場合が多いが、「蔡姑婆」の神名も寡婦になつて、長樂の實家へ歸る蔡讓のむすめアカトを反映したものと考へられなくもなからう。(趙翼：陔餘叢考^{卷三}、天妃の項に「吾鄉陸廣森進士云：媽祖云者、蓋閩人在母家之稱也。」として、媽祖の一語を以て閩人の實家における稱謂なりと云つてゐるのは、説明の不足を別にしても、媽祖にそんな意味はないので、これは疑ひもなく「姑婆」を感じ違ひしたものである。)

次に捐資建祠すなはちアカトが自ら祠堂を建てゝ蔡氏の神主を安置したことは、その實家の父兄の蔡讓・蔡璟とも

明琉社交上の重職にをり、唐榮屈指の家柄が他に嫁いで寡婦になつた一子女の捐資だけで祠堂を作ることのあり得べからざることから考へ、それを書かれてゐるまゝに信じるわけには行かない。清泰寺に關する文獻記錄は、比較的創建の年代に近い琉球神道記^四卷に「觀世音菩薩道場」として、清泰寺が崇元寺はか十寺と共にしか出てゐず、球陽の僅か少し前に書かれた徐葆光：中山傳信錄には「清泰寺：止三四楹小寺也」とし、蔡氏家譜の記事は傳説であるが、それにも「〔海清國泰の〕額を觀音像と共に將來して一寺を建立し：清泰寺と號した。」と、寺になつてゐる。これらの資料から推して清泰寺ははじめから觀音寺であつたことがわかるので、蔡世昌：久米村記に「其始浮屠居之、名曰清泰寺。其後澹園公與我伯祖價而售之。毀其舊寺：額曰忠靈堂。」といふのは事實に近いと認められる。澹園公すなはち蔡溫のときに至つて、やうやく祠堂になつたもので、アカトが建てた祠堂とは違ふのである。たゞ考へるに、清泰寺は唐營の久米村における唯一の觀音寺として、觀音の信仰厚き閩人になじまれるのは疑ひないが、蔡讓の女と傳へられるアカトは寡婦である上に、蓄財を持つてゐるので、

中國社會の習俗によく見受けるやうに、相應な寄進をしてそこに身を寄せたりしたかも知れない。さうして、或は寺の中に蔡氏の先賢を祀る一室を闢かせて祖宗を追慕したりしたのが、後に傳説を生む素材になつたのではなからうかと想像せられる。従つて、彼女が、忠惠公が萬安橋を造るときに觀音が顯聖してそれを成さしめたことを想ひ、祖祠に觀音を供奉して崇信した、といふ話は、恐らく事實とは逆で、觀音寺に祠堂を作つたから、萬安橋にからまる觀音顯聖の話が持ちこまれた、とこそ解すべきであらう。次に萬安橋をはじめ、祠堂創建の傳説に出て來るいろ／＼なことがらを順次に解いて見る。

泉州の萬安渡は、元豐九域志に樂洋とあり、方輿勝覽からは洛陽江と見えた、晉江・惠安の交界を流れるかはの渡り場で、兩縣諸水が滙合して海に注ぐ所にある。その石橋の架設については蔡襄に萬安橋記があつて、清朝までその自筆の碑文が橋畔に残つてゐるが、それによると、

泉州萬安渡石橋、始造於皇祐五年四月庚寅。以嘉祐四年十二月辛未訖功。參趾于淵、醴水爲四十七道。梁空以行、其長三千六百尺。翼以扶欄、如其長之數而兩之。靡

金錢一千四百萬、求諸施者。渡寶支海、去舟而徒、易危以安、民莫不利。職其事者：盧錫・王寔・許忠・浮圖義波・宗善等十有五人。既成、太守莆陽蔡襄、爲之合樂、讌飲而落之。明年秋、蒙召還京、道緣是出、因紀所作勒于岩左。

と記し、皇祐五年四月に造りはじめて、嘉祐四年十二月に功が訖るまで、前後七年もかゝつたことを示してゐる。たゞ方輿勝覽にも「萬安橋一名洛陽橋。宋嘉祐中、太守蔡襄累址於淵、立石爲梁……」と出てゐるやうに、よく蔡襄が石橋の首創者であるかの如く書かれるのは、完成した時の事情を前におしなべたもので、事實と違ふことは云ふまでもない。蔡襄は至和二年泉州に知たるの命を受けて至和三年二月に赴命したが、六月には離任してをり、嘉祐三年に再び命ぜられて赴任するまで泉州を離れてゐるので、明らかに石橋の開始には與つてゐないのである。八閩通志卷六地理、橋梁泉州府晉江縣の項に、

萬安橋在府城東北三十八都。亦名洛陽。宋慶曆初、郡人陳龍登石作沉橋。皇祐五年、僧宗已及郡人王寔・盧錫倡爲石橋。未就、會蔡襄守郡、踵而成之。醺水爲四十七

道。長三百六十餘丈、廣丈有五尺。紹興以來、郡守張思誠・張堅・顏師魯・劉偉叔(煒)・胡器相繼修之。橋之舊址低下、潮至輒沒其梁。宣德中、知府(馮)禎・通判朱旭、命僧正淳果石、增高三尺有奇。景泰四年、三水道士梁俱斷、知府劉靖・同知謝琛重修。宋蔡若水詩：石架長橋跨海成、論功直得萬安名。

と述べて、慶曆の初に郡人陳龍が石を登して沉橋を作つたが、皇祐五年に僧の宗已と郡人王寔・盧錫の提倡で石橋を作り、未だでき上らぬところへ蔡襄が郡の守に來任したので、工事をついで完成させたとしてゐる。これはほゞ萬安橋記と符合する。なほそこに擧げられた、紹興以來の重修者を萬曆泉州府志卷之九の古今郡守に對照して見るに、宋では紹興間の張思誠、淳熙間の張堅、同じく顏師魯、嘉熙間の劉偉叔各州知事、明では洪武間最後の胡器、宣德中の馮禎、景泰四年の劉靖各知府があり、殆んど合致してゐるので信じられよう。(明末、曹學佺：名勝志に「宋慶曆初、郡人李龍始登爲浮橋、皇祐五年蔡襄建石橋。」とあつて、八閩通志を抄襲しながら陳龍を李龍に誤り、沉橋を無意味な浮橋になほし、また石橋倡導者の一條を削つたために、建造

の経過を全く曖昧にしてみましたのは杜撰の極と言はねばならぬ。)

後の、琉球文獻に現はれる傳説を考へるときのために、萬安橋が明代にどんな修造を経たかをもう少し調べて見ると、手近な資料としては萬曆泉州府志であらう。該志^{卷之五}橋渡の項に、

萬安橋在三十八都洛陽江。：左右翼以扶欄^(欄)、爲南北中三亭。：橋下令居民種蠣固之。永樂戊子守胡器修。舊趾低、潮湧石沒。宣德中、守馮禎命郡人李俊育・僧正淳增高三尺。景泰四年橋梁斷其三間、守劉靖修之。嘉靖二十九年、守方克修。隆慶元年守萬慶再修。仍嚴取蠣之禁。萬曆三十五年、地大震、橋梁圯、址復低陷。守姜志禮大修之。橋以南委晉江、橋以北委惠安、董其役。蔡公祠・扶欄・樓亭壯觀於舊。

とある。泉志は當の明朝の重修だけしか取上げてゐないが、それを八閩通志に載せられたのと對照すると、洪武末に赴任した知府胡器の修造を永樂戊子とし、宣德中の重修については「知府馮禎と通判朱旭が僧正淳に命じ…」とあつたのが、「守馮禎が郡人李俊育と僧正淳に命じ…」に變つてゐる

る外は同じである。このやうな橋梁工事を命じる人は府の責任者一人によるのがあたりまで、命ぜられる者は僧と共に民間代表者も入れるのが常識だから、府志の記述が順當であらう。嘉靖以後の分は八閩通志にはないけれど、泉州府志の編輯された直前に當るので、多分、大過はなからうと思はれる。もしさうならば、萬安橋は舊趾が低くなつて潮が來れば梁石が沒してしまふので、宣德中に知府の馮禎が石を積累ねて三尺高くしたと、景泰四年に水道の石梁が三本折れたときに知府の劉靖がそれを修復したこと、後は嘉靖二十九年と隆慶二年の修理を経て、萬曆三十五年大地震のために橋梁が崩れ橋址が陥沒した際、知府の姜志禮が晋安と惠安の人に半分づゝ責任を負はせて大修理をしたとげたといふのが經歷のあらましにならう。奇怪なのは、府志^{卷之十}古今宦蹟にも「蔡錫：以給仕中陞知泉州。：洛陽橋圯、廢石有刻文曰：石頭腐爛、蔡公再來。至是錫捐俸修之。民祀于蔡忠惠祠畔。」と見えてゐる、宣德末の蔡錫の事蹟が書かれなかつたことである。それは、事實としては「俸を捐てゝそれを修した」程度に過ぎなかつたためであらう。ところで王慎中：萬安橋記の如き記録が散見するやうに、

明の半頃から福建では、石橋を作るとき潮流が激しかつたので、蔡襄が海神に檄させたが、使者がうつかりしてゐる中に錯の字が示され、それで神意を廿一日の酉時だと判断して着手したら、果して潮が退き橋趾をすえることができた、といふ話が言ひだされた。勿論、他にも類話の多い傳説であり、また雷禮：皇朝列卿傳の如く蔡錫當時のことに繋げた記録も散見するが、要するに、萬安渡石橋が超人的工事として民衆に深く印象されて來たのと、その創建の功を一身に集めた蔡襄がまた不出世の狀元・書家として神秘的なほど學名を謳はれたために、兩者にからまる傳説が無數に發生してゐたのである。⁽⁴⁾琉球にもたらされたのもその一部分である。

×

琉球に入つた傳説は、いふまでもなく萬安橋を建造する中途に、觀音が一役演じたといふ話で、球陽のアカトの記事に「且つアカトは、宋に忠惠公が萬安橋を造りしとき、觀音の靈顯があつてその橋を成さしめ、今に至るも海は清く國は泰かで、萬民が風濤の險阻を免れるのは誠に……觀音の靈幫の係はるところであるを想ひ、觀音を祠堂に供へ

た。」と出てゐるそれである。こゝにはゆる觀音の靈顯譚は文面だけでは具體的なことが分らぬが、何求：閩都別記に現はれてゐる次の物語を見れば、氷釋せられよう。該書の臨水奶傳説に、

天復年間、觀音大士因泉州洛陽橋欵紉將停工、乃化美女泊舟江中、請人拋擲金銀。中者隨之爲妻妾、擲空中之銀、以助建橋。……後來、呂洞賓亦將化身來擲。觀音急與王小二擲中。俾衆了願、自亦借風隱遯。同時呂洞賓來至、乃將銀向空洒擲。被觀音壁拂一拂、其銀反向洞賓身上撲來。舉袖抵拂、而頭上青髮已被銀粉粘白一根。洞賓將此拔棄水中、其髮即變一白蛇而逝。觀音知蛇將爲世患、乃啗指血彈送陳家投胎爲女身、以収此蛇……（要約）

とあつて、觀音が萬安橋の經費が枯渴したのを助けるため、美女に化けて船を泛べ、當つたら妻になつてやると云つて人々に金銀を投げさせ、その金銀で建橋の資金にあてた、とある。物語の内容は臨水奶の異生譚を作りあげるべく雑多な話を組合せたものに違ひないけれど、その中へ萬安橋が取入れられたのは、萬安橋にまつはる傳説にさういふ資料が存在してゐたことを示すと思はれる。球陽のアカトの

記事はそれを豫想しなくては解しがたいので、當時福建に傳へられたのが琉球にも入つてゐてアカトの話に結びついたのであらう。福佬話で「舗橋造路」すなはち橋をかけ道

を作ることゝ云へば、それは現世の功德を積む手近な修業のひとつに考へられてをり、佛教團體の奨励するところでもあるので、かやうな事業の發起乃至募捐には僧侶が與る場合が多い。例へば八閩通志卷之十八 地理に出てゐる晋江縣の

橋梁の内、順濟橋は元僧弘濟重修、石筍橋は宋僧文繪始作、鳳嶼盤光橋・清風橋・登瀛橋は宋僧道詢建、善利大通橋は宋命・僧智資營建、悲濟橋は宋僧法超建、玉欄橋は宋僧惠仁重修とし、殊に適南橋・陳翁橋・下保橋・御亭頭橋は何れも元僧法助建か重修重建に係るものである。蔡襄の萬安橋記に、「其事に職する者」として五人を擧げた内に、特に

「浮圖義波・宗善」と浮圖を二人も入れてゐることからも、いかほど佛教徒に頼つたかゞ知り得られる。さすれば前後七ケ年も續けられた困難な工事中に、佛者の靈顯と助力を示すやうな話題が生起するのは當然で、それが時代の雰圍氣に育てられて閩都別記に見える傳説の萌芽に發達したと推測せられる。勿論、この種の物語ができたのは明末をさ

う遡るとは考へられず、明初のアカトが「それをもつて……」云々といふのは、球陽の書かれたときの話に過ぎないのは云ふまでもなからう。

觀音が蔡襄のことで顯靈した話は、蔡氏家譜にももうひとつ違つたのが見えてゐる。直接、萬安橋に對するものではないが、

襄の母が萬安橋を渡りしとき颶風に遭ひ、觀音大士を念じて幸に難を脱することができた。仍て報恩の爲に、襄自ら資を捐て、萬安橋を營建し、海清國泰四字の額を掲げた。後、その額を觀音像と共に將來して一寺を建立し、海清國泰の義を取つて清泰寺と號した。

とある。これらは固り一片の起源説話であつて、殊に清泰寺の由來に關する條は年代の上からも事實に反すること甚だしい。しかし蔡襄の母の遭難と萬安橋建造との關係については、福建にその話の母型に當るらしい傳説がある。萬曆四年慎蒙が版刻した名山諸勝一覽記、又の名游名山巖洞泉石古蹟卷之八に蔡襄：萬安橋記を掲げた後に、

萬安橋未建、舊設海渡渡人。每歲……沈舟而死者無算。

宋大中間某年月日、濟渡者滿載、至中流風作、舟將覆、

忽聞空中有聲云：蔡學士在、宜急拯之。已而風浪少息、舟人皆免於溺。既渡、以姓細詢同渡者、止有一婦乃蔡姓也。時婦方娠、已數月矣。：蔡姓婦亦以爲異、即禱願於天曰：吾今懷娠、若生子果至官、果至大學士、必造與梁、以免病渡之苦也。後生子即忠惠公。襄以狀元及第後、出守泉州。太夫人追憶前事、促公創橋……。

といふ記事が撰者慎蒙の跋として見え、しかも終に「予令縣漳浦、得於泉州士人之口談及父老相傳、眞非妄誕。故述之。」とも述べてゐる。物語は褚稼軒：堅瓠集に見える「洞賓化青蛇隱於泉州蔡襄爐內。襄鎔爐讀書、一夕雷震。判官云：雷部速退、無驚學士。天乃開霽。洞賓出揖曰：蒙君福蔭。謝以筆墨。後：造洛陽橋、以洞賓筆墨爲檄、使隸之海若以告之。」の物語と同じやうに、蔡襄の先天的に優越な命運を示したものであり、特に萬安橋が創建されるに至つた遠因を説明せんとして案出された話である。たゞ慎蒙の記した物語には、襄の母が助かつたのを觀音大士を念じたためとは出てゐないが、それは蔡氏家譜が取入れるときに敷衍したのか、さう敷衍されたのを取入れたのか、であらう。

x

次に清泰寺の由來にかゝる部分は論題と直接の關係があるので、その話が何に基いてできたかをやゝ細かく考へて見る。第一には蔡襄が果して萬安橋に「海清國泰」の匾額を掲げたかどうか、を問はねばならぬが、われ／＼の調べた限りではそれを確認し得る資料がない。程大昌：演繁露に、

泉州北有溪：蔡端明君謨守泉、伐石跨海而橋、自書橋旁曰「萬安渡橋」、然、蔡公自命萬安、而土人以爲他方、皆以洛陽名。

とあり、王世貞：弇州山人稿にも

萬安天下第一橋、君謨此書雄偉遒麗、當與橋爭勝。

と書いてあるさうだが、八閩通志以下、現存する萬曆泉州府志・閩書などの地方志にも、また皇宋書錄などにも所見がないので、萬安渡石橋の記文を感違ひしたものだと思はれる。歐陽修：端明殿學士蔡公墓誌銘に「(公)工於書畫、頗自惜。不妄爲人書。故其殘章斷藁、人悉珍藏、而仁宗尤愛稱之。御製元舅隴西王碑文、詔公書之。其後、命學士撰溫成皇后碑文、又勅公書、則辭不肯書。曰：此待詔職也。」と云つてゐるのに徴しても、その蔡襄が同じ橋にいくつも揮

毫するの甚だ疑問であらう。萬安橋は長さが三百六十餘丈もあつて、萬曆の泉州府志に「左右翼以扶欄、爲南北中三亭」とあるので、兩端は勿論、各亭にも額や聯の書は缺かせないが、閩書卷之八方城志によると泉州府、洛陽江の項に、橋之北亭、榜曰：洛陽之橋。趙岍書。又亭曰：濟亭。趙不貽書也。

とし、陶宗儀：書史會要では

劉澤。閩人、善大字。嘗書萬安橋三字、在海石上。徑三尺許、有隼尾存筋之法。時、蔡襄造橋、不自書、澤書之。

とも傳へてをり、劉澤の書は閩中金石略によると「刻在中亭海壖巨石之上」といつてゐる。かう見て來ると、蔡襄が海清國泰の額を書いて掲げたとは信じがたいばかりでなく、假りに掲げたとしてそんなものを觀音像と共に琉球へ將來し得るとするのは謂れないことであり、琉球に蔡襄の額が存在した形跡もないので、蔡氏家譜の説は事實を根據にしたものでないことが知られよう。しからは海清國泰の額のことは、球陽の文面に「至于今世、海清國泰、而萬民免風濤險阻……」云々とあるところからヒントを得て、それ

を清泰寺の寺名説話に敷衍したものであるまいか。

第二には、後、その額を觀音像と共に將來して寺を建てたのを、いつの誰としたか、どうしてさうしたかの問題である。これは蔡氏家譜の原文が焼失したいま、譯文だけで判斷せねばならぬのは少し心ばそいが、漠然とした氣持で書いたやうに見受けられる。⁽⁸⁾しかし家譜の筆者は、北宋の蔡襄と琉球に閩人が撥與された明初との間の時間的懸隔をはつきり意識し、數百年の「後」に將來したと考へて書いたらしくはなく、むしろ蔡襄の母子が間もなく持つて來たやうな意味に讀取れるので、琉球蔡氏第二代の讓と心像が二重うつしになつてゐたかも知れない。もし蔡讓のことならば、彼は清泰寺のできた時期と符合してゐて、建寺の動機を思はせる事蹟もある。球陽卷二尙巴志十八年の項に「蔡讓被龜鱉救命」として、

唐榮蔡讓字盛亭、爲慶賀通事赴中華。船到中洋、爲颶風所壞、人多溺死。讓抱國簡浮在海面、萬無一生。時有一大龜、忽來負讓。又有双鱉在左右扶之。讓抱着國簡、以坐龜背、任他走去。經一晝夜、走到一所、讓就登岸。乃南京之地也。

の記事が見えてゐる。通事として渡明の途中、颱風に遭つて難船し、海に浮んでゐたら、大龜などが來て彼を背負ひ、南京の地へ運ばれたといふのである。さういふ場合の奇蹟は、海神を除けば媽祖か觀音の靈顯と考へるのが常識であるから、明文がなくとも再生の德を酬謝するの舉に出るべきは云ふまでもない。具體的徴證にこそ缺けれど、彼の死後までもないときにそのむすめアカトが寺内に祠堂を作つたやうに傳へられてをり、從つて、すつと蔡氏の私寺だつた觀音寺はアカト以前のもつべきでありながら、初代の崇が建てたとは考へられぬので、讓によつたのではないかと推測せられる。彼が難を逃れた後、大陸から琉球へ戻るときに明製の觀音像や「清泰寺」の額を携へて行つたとすれば甚だ自然なことだから、觀音寺が蔡氏の私寺であつたことゝ、後に讓のむすめアカトがそこに祖先を祀るやうな所を作つたらしいことなどから推しても、さう考へ得るであらう。

×

右に考へたやうに、萬安橋にまつはる物語が頻りにアカトや清泰寺の話へ持ちこまれたのは、云ふまでもなく唐營

の蔡氏が自分らを以て、橋の完成と縁故ふかき蔡襄の後裔だとしてゐたからで、後に祖祠を忠盡堂と名づけ、君謨の畫像を供へたのも、その心理の現はれであらう。だが、蔡襄は果して琉球蔡氏の祖と認められようか。唐營の蔡氏について最も確實な資料を提供してくれるのは、蔡環がその父への封贈を奏請したときの説明である。すなはち實寶錄卷之六に、

〔憲宗〕成化五年三月壬辰、琉球國中山王長史蔡環、以其祖本福建南安縣人。洪武初、奉命於琉球國、導引進貢授通事。父襲通事。傳至環、陞長史。至是奏乞照例賜誥、封贈其父母。下吏部以無例止。

と記録されてゐる。それによると、蔡環の祖（父）はもと福建南安縣の人で、洪武の初、琉球國の進貢を導引して通事となり、その父も通事の職をつぎ、環自身に至つて長史に陞進したといふのである。いはゆる始祖といふのは、蔡氏家譜（及び徐葆光：中山傳信錄^{卷五}氏族）に崇、次の父は讓であるのは贅言を要しない。しかし蔡襄のことは、宋史^{列傳第}七十九・興化府志^{人物}や彼の蔡忠惠集の關係作品に徴するに、襄は字君謨、諡忠惠、興化仙遊人、云ひかへれば莆田人で、

南安から出た琉球の蔡氏とは齟齬する。家譜も傳信録もその原籍を泉州府晉江縣にしてゐるのは、宗族の出自をば一再泉州に出仕して足蹟を残された蔡襄にこじつけたためであるが、蔡襄が實は莆田人だつたことを附會者は思ひつかなくつたらしい。また、襄は天聖八年の進士で、治平四年に齡五十六を以て亡くなつてをり、明代までには三百年を越えるので、蔡氏家譜や中山傳信録におけるが如く、洪武五年にその六世の孫（崇）が琉球へ移つて唐營第一代となつた、といふのは年代的に不可能である。さすれば、兩者の關係は琉球の蔡氏が祖家の由緒を權威づけるために、恣意に蔡襄と結びつけたことがわかるが、その契機となつたのは、泉州の太守として屈指の人物たりし蔡襄が、偶然にも唐營の蔡氏として調子に乗つて來た第二代の蔡讓と名前が似てゐて、後の人がうつかり見分がつかなくなつたところから、次第に混淆されてしまつたのではあるまいか。重大な結果に發展してゐることも、往々にしてちよつとした偶然から起る場合があり得るものである。

x

非常にまわりみちをしたので、話を本題に戻さねばなら

ぬが、その前にアカトの父兄について述べて置く必要がある。彼女の父蔡讓は、始祖崇の後を承けて、永樂年間から通事になり、琉球國志略卷二封貢によると正統十二年までは從役してゐる。しかし、彼は進貢に從役しながら早くから福建の方にも家を持つてゐたことは、次の蔡璟咨文によつて知り得られる。歴代寶案一集卷十七に

一件戸口事。本國長史蔡璟告稱：伊父實達魯、永樂年間身膺通事、屢承朝

貢。在於福建福州府閩縣高惠里聘母梁氏。就買當地民人

范祖生房屋貳間、於永樂年間帶男一口、與母完聚。入

籍長樂縣、陳吉禮部具題

欽准完聚、優免差役住坐。厥後父故、神主安慰房內、兄

母奉祀不絕。至景泰四年母兄□故、遺下房屋、久空損

壞、無人修理。神主失祀。今環蒙差慶賀、將男壹口蔡

光、欲照正統肆年長史梁求保奏

准事理、令男入籍閩縣、優免差役。□□府查得永樂拾

肆年禮部具□奏

欽准□父實達魯將男入籍在彼、咨文照會到國、事理是實、

合行移咨、煩爲題奉施行。

右咨

禮部

天順捌年捌月初玖日

といふのがそれで、大意を摘んで言へば、長史蔡環が云ふには、その父シタルが永樂年間、通事をして朝貢に従役して來たが、閩縣高惠里に母梁氏を娶り、當地の家屋二軒を買取つて永樂年間に男の子一人をつれ、母と同棲すべく長樂に入籍し、禮部から准許された上に差役も免ぜられた。

後、父が物故して神主は兄と母とが奉祀してゐたが、景泰四年に二人とも死歿し、家は壞れ神主は祀る者を失つた。

いま慶賀に遣はされたのを幸ひ、男の兒蔡光をば、長史梁求保が奏准された前例によつてこの子を閩縣に入籍せしめられたく望むと。查べるに、永樂十四年禮部がシタルが男の子を彼地に入籍することを欽准し、照會して來た咨文があり、事實に符合するので移牒いたす次第だが、御尊慮を煩したく……云々である。さて、蔡環のこの戸口に關する咨文と封贈を奏請した談話とを基礎にして、更に蔡氏家譜その他の資料をも綜合して考へるに、蔡氏始祖の崇が琉球へ來た洪武初とあるのをその十年代と假定すれば、第二代

の讓は洪武二十年代の生れと推定せられよう。なぜなら、彼は永樂年間に進貢通事に従役してゐるといはれる上に、永樂十四年には一子を閩縣に入籍させてをり、そのとき少くとも三十前後になつてゐなくてはならぬからである。また彼の神主を守つた梁氏らが景泰四年には歿したといふから、彼は當然、正統・景泰の交に死んでゐるのはいふまでもない。さうすると、蔡環は成化五年の讓への封贈を奏請したとき、すでに長史であつたから、宣徳の初頃の生れではなからうかと認められるが、問題はその兄弟である。家譜には兄に璵・弟に璋が出てゐるが、うちでも璵なる者は全く行跡がなく、多分、長樂の家の、蔡環が咨文に兄と稱してゐた人であらうか。璋は成化九年には通事として進貢に赴いた記録が残つてをり、遅くとも生れは正統の半を下るまいと思はれる。もし、これが間違ひなければ、そのとき長樂の梁氏は四十を遙かに越えてゐたはずであるから、璋が果して梁氏の子であつたかどうか少し疑はれて來る。永樂十四年に長樂へ入籍した「兄」と、弟分の環・璋との年齢の開きや、特に璋が生れたときの讓と梁氏の年齢を併せ考へて、われ／＼は讓は琉球に別の妻がゐて、それが環

と璋らの兩者か後者だけの實母であると推測せざるを得ない。永樂十四年に家庭を作つた後、梁氏は長樂にすつと居つたやうだし、死歿後も蔡環は、兄弟以外の蔡光といふ男を連れて行つて後繼の嗣子に入れたことから、さう信ぜられる。蔡氏の族譜は通交史の研究によく引合に出されるものであるにも拘らず、その真相を考へて見る人は殆んどなかつたが、右によつておおよその見當がついたので、ではアカトは果してどんな位置を占めてゐたのか、を次に探つて行かう。

x

アカトの、琉陽における記事は前にも引いた如く、尙圓王三年の項に入れられてゐる。尙圓王三年は成化の七年に當るので、それは記事文中に「成化壬辰(密宗八年)、唐榮の東北に地を卜し、自ら資を捐て、祠堂を創建し、以て蔡氏神主を安置した。」といふ年代から來たものであらう。この外、年代については僅かに彼女が十七歳で寡婦になつたこと、五十一歳になつたことしか出てゐないが、祠堂を創建したといふ年は蔡讓が物故して十餘年の、恰も環が成化五年に先人への封贈を明室に願出て果さなかつた直ぐ後の

で、蔡氏の族内に動いてゐた表彰運動の現はれとも感ぜられる。たゞ當時の琉球蔡氏は始祖を繼ぐ唯ひとりの二代目が死んだばかりで、祀られる者はたつたの二夫婦、祀る後裔もせいぜい數家族のことなれば、普通にいふ宗族の祠堂を建てられる事情にあつたとは思はれないし、實際には建てなかつたであらう。琉陽における祠堂創建の記事が、アカトといふ織姫の腕前を示すためにできたものであることは、今更にくりかへす必要もないが、肝腎なのは、そんなに誇張されて傳へられた細嫩奇巧にして美麗絶倫なる貢物の花布を織つた織姫アカト自身の史實の問題である。それで思い出されるのは、アカトの年代が、琉球からはじめて明皇后へ土夏布を進貢した弘治二年に銜接することである。いま假りに弘治二年をアカトが五十一にて死んだ年にすると、その生れは正統四年になり、祠堂を建てたと書かれた成化八年ははたらきざかりの三十三歳、父親の蔡讓は少し年をとり過ぎるが、第二夫人の末子としてなら無理でもあるまい。この説が是認せられるとしたら、美麗なる貢物の布を織つて明朝に召され、上京の途次に長樂で死歿したといふ、遺老説傳・長樂縣志の蔡夫人とは完全に一致するの

ではなからうか。さすれば、いはゆる「花布」とはサラサでもビンガタ（紅型）でも、また浮織でもなく、實は土夏布のことである。土夏布は弘治二年明帝登極のとき皇后へ細嫩生のもの一〇疋、細嫩漂泊のもの三〇疋を進貢された後、ひきつゞき正徳元年・隆慶二年・萬曆二年にもそれぞれ進貢されてゐる。天正年間に宮古の紺細上布あやさびの製作が躍進したせゐか、萬曆七年の謝恩には急に一〇〇匹も進貢され、爾後しばしば百、二百と多量に持ちこんだやうである。蔡夫人の傳説が發展すると共に、恐らく現實の事情を反映して、その織つたものは「花布」に換へられたが、萬曆の初に技術・産額・輸出とも躍進した上布あやさびは當然、彼女の傳説・祠祀に影響を及ぼさずには置かなかつたであらう。

然らば、花布とあつたのが、何故に長樂縣志では龍袍になつたのであらうか。龍袍のごとき制服は特別の機杼によつて作られるもので、普通の技術者がかつてに與り得ないのは云ふまでもないが、私見によれば、それは恐らく蔡環の蟒服事件と結びつけられたものと思はれる。蟒服事件とは明實錄^{卷八}十九成化七年三月戊戌の條に、

琉球國使臣蔡環、以織金蟒龍羅衣雇匠綬製。時、錦衣衛校尉有輯獲市民與外國人交通者。刑部鞠之。疑其羅出於私交者。皆不服。及詢環、固稱爲其國王受賜於先朝者事聞。上命禮部稽舊籍有無。禮部云無。遂收貯內庫。仍勅諭其國王知之。

と見える經緯の事件で、三月甲申冊封を請ふために入貢した蔡環が、かつてに禁斷の、金の蟒龍を織つた羅衣を用ひて職人に縫はせたのを發見され、先帝が琉球國王に賜つたものだと辯解したが、古い文書に證據がなかつたので沒收せられたのである。これは中山世譜^{卷六}尙圓王紀にも不正確ながら摘要して載せてあるが、たとへ明朝の琉球に對するあくまで寛大な態度から蔡環を處罰はしなくとも、相當な波紋を起すのは免れない。琉球の出入口に當る福建で話題になるのは當然で、その噂の龍袍が蔡夫人の傳説に飛びこんで「花布」に取つて代つた上、「因織龍袍入貢冊封……懿德夫人召入京」と「適朝命免進京」云々の話ができ上つたのだらう、と思はれる。

とまれ、蔡姑婆の傳説はもと三十六姓の唐營蔡氏第二代、

讓のむすめアカトに出るものであつたが、長樂へ傳はつて彼地で祀祀され、それにまつはる縁起譚をはじめ、種々の傳説が生れた。媽祖と混淆したりしたのもそのひとつで、一部分の話は逆に琉球に輸入されるに至つた。ところが琉球におけるアカトの事蹟は、また琉球で清泰寺を中心として別の方に傳説化して行つたため、兩方の話はますます遠ざかり、殆んど結付が發見しがたいほどになつてしまつたのである。

「媽祖傳説の展開」の一環として「蔡姑婆」の問題に觸れざるを得なかつたわれ／＼は、細かい資料を一々吟味し批判しながらやうやくこれだけの觀察をなしとげたが、未だ勝手の分らない琉球關係文獻のことゆゑ、大方の殿しい御叱正を待つて止まない次第である。

一九五六、九、一二脱稿

註

- (1) 天妃が投身したといふ話は、すでに萬曆三年の呂一靜：興化府志の興地、山川に「湄洲嶼在大海中、林氏靈女生於其上、又謂林女溺水、神棲於此。」と出てゐるが、島に傳はる民間の素朴な傳説であつて、これとは性質が違ふ。
- (2) 閩都別記は日本國內の主な圖書館になかつたので、魏應麒：臨水奶にひかれてゐるのを北京圖書館に照會して、それを確めた上で使用した。
- (3) 萬安橋の創建に當つて海神に徴したといふ傳説の發生と變遷については別稿に譲る。
- (4) 弇州山人稿の記事については明版「弇州山人四部叢」を調べたが、尨大なため一時さがし出すに至らなかつたので、引例は暫く蔡忠惠集の別紀補遺に従つた。
- (5) 蔡氏家譜はいまゝで沖繩圖書館に一本を所藏してあつたが、太平洋戦争で爆撃を受けて焼失したため、信頼できる譯文から引くより方法がなかつた、一言おことはりする。